



| | |
|--------------|---|
| Title | <戦争の時代>へ行って還りし物語 |
| Author(s) | 内海, 紀子 |
| Citation | 太宰治スタディーズ. 2016, 6, p. 4-5 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/57190 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

一九三三（昭和八）年は過ぎ越しにくい年である。

前年九月、『第七官界彷徨』の尾崎翠が健康を害して故郷鳥取へ連れ戻され、「わたくしといふ現象」（『春と修羅』序）を明滅する因果ととらえた宮澤賢治が三三年九月に逝去、翌年四月には「そよぐ幻影」を絶筆として大手拓次が没する。三人とも大正モダニズムを呼吸した作家だ。揺らぎ分裂し消滅する（私）の表象を通じて、自己の絶対性に対する懷疑を唱えた文学者たちが、踵を接して文学場から退場している。もちろんこれは文学史を恣意的に切り取った見方に過ぎない。しかし三一年に満州事変、三二年に上海事変が勃発し、やがて太平洋戦争へと続く道筋を日本が速度を増しつつ進み始めた時代背景を顧みると、何らかの符合を想像してみたくなるのだ。本来多様であるべき個人を集団的な（国民）として統合する総力戦体制がすぐそこまで迫っている。時代は既に、複数化する（私）を、押し潰しつつあったのではないかと。ところで一九三三年は、津島修治が「太宰治」の筆名を用いて「列車」（サンデー東奥）二・一九付）を発表し、新進作家として本格的な創作活動に入った年でもあった。この「列車」に兵士の出征風景が刻み込まれていることは興味深い。

三輦目の三等客車の窓から、思ひ切り首をさしのべて五、六人の見送りの人たちへおろおろ会釈してある蒼黒い顔がひとつ見えた。その頃日本では他の或る国と戦争を始めてゐたが、それに動員された兵士であらう。私は見るべからざるものを見たやうな気がして、窒息しさうに胸苦しくなつた。

太宰の文学は戦争の影を刻み込みつつ始まつたと言えそうだ。以後、「道化の華」（『日本浪漫派』一九三五・五）、「女生徒」（『文學界』一九三九・四）等を書き上げ、他の文学者のように従軍作家として時局に乗るでもなく、「鷗」（『知性』一九四〇・一）の表現を借りれば「銃後奉公」に徹し、『津軽』（一九四四・一一、小山書店）、『お伽草紙』（一九四五・一〇、筑摩書房）を始めとする作品を発表、旺盛な執筆活動を展開した。一九四八（昭和二三）年に自死を遂げるまで、彼の活躍時期は十五年戦争とほぼ完全に重なる。太宰は総力戦体制が日常化していく時代と併走した文学者だった。太宰治と戦争は、彼自身や作品が語る以上に密接かつ複雑に関わり合っていたに違いない。——「太宰治スタディーズ」第六号はこのような立場から、同時代の文学場やメディア状況も視野に入れ、シリーズ「太宰治と戦争」に取り組んだ。

イントロダクション

—— 〈戦争の時代〉へ行きて還りし物語

内海紀子

戦争に対する太宰の姿勢については多くの先行研究の積み重ねがある。早くに奥野健男『太宰治論（決定版）』（一九六六・四、春秋社）が用いた評言「否定を潜めた無視」は広く知られている。一方で、赤木孝之『戦時下の太宰治』（一九九四・八、武蔵野書房）は、太宰には戦争への〈抵抗〉は窺えないとし、「起こっていることは起こっていることとして、それを視野に入れつつ芸術家としての自分の仕事を続けていこうという姿勢」すなわち時代に「順応」して生き延びる太宰のしたたかさをこそ見出している。

北川透『戦時下の文学』（岩波講座日本文学史 第二三巻、一九九六・六）は、戦時下の文学作品を評価／批判する際にしばしば用いられてきた〈反戦文学か／戦争賛美か〉という分類軸を排し、「表現のレベルでは反戦も厭戦も抵抗もほとんどありえなかった」戦時下にあつて、「十二月八日」（『婦人公論』一九四二・二）が「文学が文学であることの可能性を証している数少ない作品の一つ」だったと位置づけている。太平洋戦争開戦の日の高揚感を記録したとも読める「十二月八日」は、太宰文学にとって本質的な技法といえる女性独白体を用い、「家庭の主婦」の目を通して夫に作家を対象化する。ここで主婦に〈私〉がほぼしらせる昂奮も、彼女のまなざしに批評される太宰と覚しき作家の像も、いずれも太宰の思想と重なりつつずれていくと北川はとらえる。「十二月八日」の仕組みは、「道化の華」における〈私〉が無限後退的に分裂する語りの延長線上にある。太宰は〈私〉を複数化させる語りの技法を洗練化することによって、個としての〈私〉が国民としての〈我々〉に統合されていく戦時下の暴力に抗え得たのではないだろうか。

戦後、太宰の小説にはしばしば復員兵が登場する。「斜陽」（『新潮』一九四七・七一〇）で復員してきた直治は、「南方のお話」を姉のかず子に求められ、「何も無い。何も無い。忘れてしまった。日本に着いて汽車に乗って、汽車の窓から、水田が、すばらしく綺麗に見えた。それだけだ」と答える。

昭和八年に「列車」で出征していった兵士は、ほぼ十五年という年月を経て、敗戦後の日本に帰還した。太宰の文学も〈行きて還りし物語〉であったのかと想像してみたくなる。復員兵たちも戦後のかず子も、戦争という時代に行つて還つた。彼らが見たものは何か。「忘れてしまった」「何も無かつた」と振り返る彼らは、戦争を明示的に語らないことで何を語るのか。問いはいつも私たちの前にある。